

# 李伯元の創作意識

麦生登美江

一

李伯元は1867年4月18日、江蘇省上元の封建地主官僚の家庭に生まれた。名は徵君、諱は宝嘉、字は伯元。ペンネームは南亭亭長をはじめとして南亭、南亭長者、遊戯主人、芋香、二春居士、願雨樓主、謳歌變俗人、酒醒炎消之室主人などを使っている。<sup>1)</sup>

彼は3才にして父を喪い、14才まで伯父の李念之に養育された。念之は山東道員になったこともあり、長年、東昌知府、濟州知府などの職にあった。従って伯元は幼少年期を知府の役所で過ごし、科挙の勉強をした。14才の時原籍に帰って受験し、秀才の試験には第一番で合格し給費生となったが、その後は何度受験しても及第できなかった。

従兄の李穀宜が道員を以って滁州土釐局の総裁をしていたので、伯元は書記を勤めたりした。後、彼は県丞（副知事）の資格を買い山東省に割当てられたが、欠員がなくなかなか実官にありつけなかった。中日戦争の後、伯元は李家の一族が多人数であること、さらに科挙の試験にしばしば落第したことなどによって、上海へ出て文筆で生活を立てることになる。

彼が上海でまず起こしたのは“指南報”で1896年刊。ついで翌年5月下旬“游戯報”を大新街の惠秀里に創刊したが、さらに1901年“游戯報”を売って別に“海上繁華報”を樹てる。この間の事情を周桂笙は、

1) 張静廬 李松年「辛亥革命時期重要報刊作者筆名録」 新建設編輯部編『文史』第1輯 中華書局 1962年10月 93頁（但し、樽本照雄氏『繪像小説総目録』によると、『繪像小説』においては「願雨樓」となっていて、「主」はないそうである）。

游戲報を創刊し、一時靡然として風に従い效顰する者、踵を相接する也。南亭乃ち喟然として曰く「何ぞ善く步趨して変を知らざるや」と。遂に繁華報を設け別に一幟を樹つ。一紙風行し、千言日に試み、滑稽玩世の文と雖も而るに識者咸く之を推重す。<sup>2)</sup>

と述べている。1902年3月16日の“繁華報”の広告によれば、報館はさらに『繁華雑誌』を刊行する計画であったが、実際に出版されたかどうかは不明であるという。<sup>3)</sup> また1900年3月、〈海上文社〉の機関紙として“海上文社日報”が発刊されているが、〈文社〉は伯元が創立したものであるし、“日報”も“繁華報”と同じく大馬路億鑫里に設けられているので、この“日報”の編集にも伯元はタッチしていたと考えられる。『天涯芳草館筆記』によれば、“日報”は、

月に詩鐘等三課に分け、課に應ずる者は毎巻20文を納む。海内の才人、一時ことごとく集まる。<sup>4)</sup>

という状況で、伯元の文名は次第に高まっていった。

李伯元が上海へ出た時、上海の新聞はただ“申報”“新聞報”“字林”“滬報”などわずか数紙のみであったが、伯元の主編したこれらの小報に刺激されてその後同様の小報が紛々と起こった。これらはいずれも消閑のための小型新聞にすぎないが、阿英はそれらの役割を次のように位置づけている。

(小報が) もし『風月』や『勾欄』(妓楼のこと——筆者註)に言及しなければ、これらの小報は当時においては物質的基礎を失なって存在することができなかつたのだ。……これらの小報は同時にまた当時の社会の暗黒を暴露し、買弁、官僚及び帝国主義を攻撃し、晚清譴責小説発展の基礎

- 
- 2) 周桂笙「新菴筆記」孔另境輯録『中国小説史料』古典文学出版社・上海 1957年 235～236頁。  
 3) 阿英「晚清小報録」阿英著『晚清文芸報刊述略』古典文学出版社 1958年3月 57頁。  
 4) 同上 72頁より引用。

を定めた<sup>5)</sup>。(傍点は引用者)

確かに李伯元についてみても「俳諧嘲罵の文を作るを喜び、庚子の後はじめて力を小説に致す」<sup>6)</sup>とあり、小説家としての彼の名を一躍有名にした『官場現形記』はこれを“繁華報”に連載し、「購閱する者踵相接し、是れ小報界の極盛時代となれり」<sup>7)</sup>と海上漱石生が書いているように、小報がまず『新小説』など文学雑誌発行以前における小説発表の場を提供したのであった。『現形記』は、いわゆる〈清末小説〉と称されるものの最も早期の作品の一つである。その後『新小説』『繡像小説』『月月小説』などの発刊に伴い、続々と新しい小説が生まれてくるが、伯元はそれに先立ち同じく“繁華報”に1901年から2年にかけて『庚子国変弾詞』も連載している。

ところで『現形記』発表後、彼は経済特科の推せんを受けたがその事について寧遠は、

李伯元が「官場現形記」によって有名になると、数人の策略に巧みな老官僚が彼を買収しようとして経済特科に応ずるよう推せんした。彼はペテンにかかることを肯んぜず断固として拒絶した。さらにある督撫が伯元の逮捕方を下令しようとしたが、彼は平然として恐れなかったので、当時の人々はみな彼の気骨に敬服した。<sup>8)</sup>

と述べている。阿英も、

かつて経済特科に応ずるべく薦めらるるも赴かず；またかつて顕者の効する所となるもまた惧れず、時政を攻撃すること故の如し、時に以って高しとなす。<sup>9)</sup>

5) 同上 50頁「晚清小報録」引言補充。

6) 魏如晦「清末四大小説家」2)に同じ 236頁。

7) 海上漱石生「退醒廬筆記」巻下 孫楷第著『中国通俗小説書目』巻7 作家出版社 1957年 201頁より引用。

8) 寧遠著『小説新話』香港上海書局 1972年12月再版 94頁。

9) 6)に同じ 236頁。

と言い、また王祖猷は、

李伯元は上海に行った後、経済特科の選に應ずるよう推せんされたが、周少樸に阻止された。多分かつて文字を以って周に罪を得ていたのであろう。<sup>10)</sup>

と述べている。呉趼人は李伯元と親しく、伯元の死後、彼の伝を書いているがその中にも、

光緒辛丑（1901年6月3日——引用者註）、朝廷は科を開転し経済の士を徴す。湘郷の曾慕陶侍郎、君を以って薦む。君、謝して曰く；「余をして仕えんと欲せしむるは今日及ばざる也」と。辞して赴かず。台諫中に君を忌む者有り、竟に諸々の彈章を列するを以ってするに会す。君笑いて曰く；「是れ乃ち真に我を知る者也」と。これより小説に力を肆まにし、而して開智譏諫を以って宗旨となす。<sup>11)</sup>

とある。

上述のように、李伯元が経済特科に推薦されたことについては呉趼人ら4人の記述が一致しているものの、彼が自分の意志で辞退したのか、それとも周少樸に忌まれて諦めざるを得なかったのか判然としない。

呉趼人も李伯元と同じく曾慕陶から経済特科に推薦されるが、趼人は「吾が生は涯<sup>かぎ</sup>り有り、姑く之<sup>す</sup>を捨てて以って自適を図らん」<sup>12)</sup>と彼もまた受験を辞退している。或いは寧遠の言うように、曾らが伯元や趼人を官吏に取立てることによって口封じしようと思論んだが、彼らはそれを潔しとせず、ジャーナリスト、作家として一生を終えたのかも知れない。しかしいずれにしても彼らのいわゆる〈譴責〉小説が支配層を震撼させたのは事実であろう。

10) 王祖猷「不要曲意美化李伯元的作品——与海瀾同志商榷」『光明日報』1966年2月6日註①より引用（王祖猷は『小説月報』15巻6期「読書札記」より引用）。

11) 呉趼人「李伯元伝」范烟橋著『中国小説史』華夏出版社 1967年 211頁。

12) 李懷霜「我廬山人伝」同上 216頁。

それはさておき、李伯元について『談瀛室隨筆』には「その人と為り、とくに風流蘊藉、少しも俗氣にまみれるなし」<sup>13)</sup>とあり、呉趯人も彼を、

つとに大志を抱き、俯仰凡ならず、匡救の才を抱き、而してへつらうを恥とし、当世の無知なる者の故に遂に痛哭流涕の筆を以って嬉笑怒罵の文を書く。……ああ！君が才、必ずしも小説を以って伝うるには及ばず、而るに竟に小説を以って伝う。君の不幸、小説界の大幸なり。<sup>14)</sup>

と評して悼んでいる。

1903年、伯元は『繡像小説』を発刊し、次々に小説や弾詞などを書きまくるのであるが、1906年3月14日、結核のため40才で上海、億鑫里の旅邸において世を去った。胡適によれば、伯元には子供がなく、彼の死後家計が窮迫したので当時、南方の戯劇界で有名であった俳優の孫菊仙が伯元に対して知己の恩に報いるため（孫はかつて小報で伯元に賞讃されたという——筆者註）出資して葬ったという。<sup>15)</sup>

## 二

ところで李伯元については新中国で興味深い現象がある。それは1965年から66年にかけて“光明日報”紙上で《李伯元論争》とでも呼べる論争がおこっていることである。これは他の清末作家には見られない現象である。劉鉄雲の『老殘遊記』については、50年代から断続しつつも比較的多くの論文が発表されているものの、集中的に論争が展開されるのは李伯元だけである。まず“光明日報”における李伯元関連論文を拾い上げてみると次の通りである。

〈1965年〉	日付
「論李伯元作品的思想傾向」	章培恆 6.6

13) 「談瀛室隨筆」 同上 211頁。

14) 11) に同じ。

15) 胡適「官場現形記序」 胡適著『胡適文存』第3集1 遠東圖書公司 1971年5月3版515頁。

「李伯元作品思想傾向初探」	文乃山	10. 31
「不要美化改良主義作家和作品」	王俊年	11. 7
「從《庚子国變彈詞》看李伯元作品的思想傾向」	江東陽	11. 14
「應該怎樣評価李伯元的作品」		
—答文乃山同志—	章培恆	11. 28
「歪曲晚清社会現實的《文明小史》」	石 雨	12. 19
〈1966年〉		
「李伯元作品的思想傾向是進步的」	海 孺	1. 16
「不要曲意美化李伯元的作品—与海孺同志商榷—」	王祖猷	2. 6
「《官場現形記》的譴責与揭露有進步意義」	李永先	2. 13
「從《活地獄》看李伯元後期作品的傾向」	李茂肅	3. 6
「關於李伯元作品評価的幾個問題」	章培恆	3. 13
「論晚清“譴責小説”中的揭露和譴責」	江東陽	5. 22

もちろんこれら2年間に“光明日報”に發表された諸論文に先行する論文として解放後だけに限ってみても、吳哲の「“官場現形記”簡論」（『光明日報』1956年6月3日）、路遙の「論“官場現形記”的思想性」（『文史哲』1958. 8）など数本があり、吳趸人や曾樸などについてもまったく論じられてこなかったという訳ではない。しかし、このように大量の論文が短期間に發表されたのは李伯元だけなのである。

この論争の主要な論点を整理してみると、要するに「李伯元の諸作品が現実に対して起こした“譴責と暴露”には進歩的意義がある」と評価する海孺・李永先・文乃山らに対して、章培恆・江東陽らは「あくまでも封建制度擁護の立場で執筆した李伯元らの作品には、反封建的意義も徹底した無情な暴露もない」と批判する。前者は作品そのものの社会的作用を重視し、後者は作家の世界観を問題にする。それは両者の文学観の相違だと言ってしまうまでもそれまでであるが、しかし筆者がこの《李伯元論争》に興味を引かれるのは、それがたんに李伯元個人ないしは清末〈譴責〉小説の評価問題にとどまらず、

広く晚清文学そのものの再評価へと発展していこうとしているようにみえるからである。あたかもこの論争の一応のしめくりであるかのような観を呈している江東陽の前掲「論晚清“譴責小説”中的揭露和譴責」においては次のように述べられている。

私は李伯元の作品の思想傾向に対する討論を通してさらに新たに晚清文学を評価し、いわゆる“四大譴責小説”を以って晚清文学の代表作とする伝統的観念を徹底的に打破し、新たに文学史上、暴露と譴責を主題とする作品を評価し直す必要があると考えている。

江東陽が指摘する通り、“四大譴責小説”を以って晚清文学を塗りつぶす従来の文学史の安易な姿勢は、今後検討され直す必要がある。文化大革命の勃発を機に中断された観のあるこの《論争》が、今後中国でどのように再び展開されていくのか興味深いのが、日本でも独自の晚清文学再検討の地道な努力が積重ねられなければならないだろう。

### 三

李伯元の創作意識は、梁啓超の「論小説与群治之關係」発表以前と以後とでは変化していると思われるが、ここではまず前期の創作意識について考えてみたい。

まず、1901年から“繁華報”に連載され始めた『官場現形記』について『談瀛室隨筆』には李伯元が、

未だ官場現形記を作らざるの先、胸中に無限の蘊蓄あるを覚ゆ、以って此を借りて発舒すべし。<sup>16)</sup>

と語ったと述べられている。つまり『現形記』では、作者は胸中の様々な思

---

16) 13) に同じ。

いを小説という形を借りて吐露しようとした訳で、現実に対する強いアプローチを意図したのではなかった。そのことが李伯元は「戯作者的精神に徹している」<sup>17)</sup>とか、「現実に対決しようとする緊迫した作家精神もあまりなく、かつ作者の批判精神の稀薄さは、作者の態度を戯作者的なそれと解されたり……」<sup>18)</sup>とか、『現形記』の第1回冒頭のエピソード（それは次のような寺小屋教師が学童に科挙の勉強に身を入れるようにと訓戒をたれる場面であるが）、

老三は言った：「挙人に合格したらどんな良いことがあるのですか」  
 王仁：「挙人に合格しただけで進んで進士に合格し、翰林を手に入れたら良いことはとても多いのだよ」 老三：「つまりどんな良いことですか」 王仁：「翰林をせしめると役人になれる。役人になると金もうけができる。さらに役所におさまって人をぶつこともできる。外出の際にはドラを鳴らし、先払いがつく。いやはや、こんなすばらしいことは勉強もせず、挙人にも合格しなかったら、どうして手に入れられるものか」 老三は……突然たずねた：「先生、あなたも挙人なのにどうして進士に合格して役人にならないのですか」<sup>19)</sup>

に関して「このような一種の戯れ文の世界こそ実は『現形記』の世界なのであって……」<sup>20)</sup>とか、「彼は“遊戯報”に続いて“海上繁華報”を主宰した。繁華とは花柳界の繁栄を意味する。これに連載したのが彼の出世作『官場現形記』であったのだから、この小説は彼にとっては遊戯の延長線上のものでなければならぬ」<sup>21)</sup>といった批評を生み出す要素になっている。

さらに1901年から2年にかけて同じく“繁華報”に連載した『庚子国変弾詞』の第15回では、李伯元は著書の目的を、

17) 入矢義高・石川賢作訳『官場現形記』上 中国古典文学大系50 平凡社 昭和43年12月5日初版 入矢義高「解説」553頁。

18) 三宮政美「官吏の生態（『官場現形記』の世界）」内田道夫編『中国小説の世界』評論社 昭和45年12月10日初版 255頁。

19) 李宝嘉著・張友鶴校注『官場現形記』上 人民文学出版社 1957年・北京 4頁。

20) 宮内保「清末小説における写実精神について」論説資料保存会編『中国関係論説資料』13第2分冊（下）1971年 60頁（原載は『語学文学』9）。

21) 澤田瑞穂「遊戯——清末小説管見——」『野草』第2号 8頁。

さて私がこの弾詞を作るのは、新聞の読者に今日の平和によって前年の禍乱を忘れてしまうのではなく、氣力を振り起こして各人が各々の事業を行って欲しいと要望するにすぎず、そうすれば作者の一片の苦心そむに負かない訳です。<sup>22)</sup>

と説明している。さらに1902年に書かれた作者自身の『庚子国変弾詞』叙には次のようにある。

和議既に成るも群情頓に異なれり、驕侈淫佚の習、また人心に中り、敷衍塞責の風、仍ち天下を被う。幾々乎として時移り世異り、境過ぎ情遷る。著者ここに於て《国変弾詞》の作有り。……亦曰く、此れ杞人憂天の語、俳優相戯の詞に托すという耳。<sup>23)</sup>

この『国変弾詞』は、第1回の回目が〈安不忘危、痛定思痛〉となっていることから察せられるように、1901年9月7日、《辛丑条約》が締結され、とにもかくにも中国を激しく揺り動かした義和団事変の一応の結着がついた時点で、事変を振り返って執筆を始めたものである。「海瀕閑話」では、

読者をして惕然として心を驚かしむ。且つ韻語を以て之を出だし人を感じさせること尤に易し。当に官場現形記の上にあるべし。弾詞の作、新小説を講ずる者みな之に及ばず。余謂うに風を移し俗を易えるはまさに之より入手すべし。<sup>24)</sup>

と弾詞の通俗性を高く評価し、これを『現形記』の上に置いている。阿英もまた、

22) 阿英編『庚子事変文学集』第3巻 説唱 中華書局 1959年5月第1版 761頁。

23) 阿英編『晚清文学叢鈔』小説戯曲研究巻 中華書局 1960年 194頁。

24) 「海瀕閑話」 蔣端藻編『小説考証』附続編拾遺 古典文学出版社 1957年7月初版 375頁。

この弾詞は古い弾詞の最高の発展を代表しており、英雄美人、才子佳人という一般の固定した旧套を打破して広大な社会生活、歴史上の特殊な事変に向きあっている。<sup>25)</sup>

と、弾詞という古い民間文学の形式に盛られた新しい内容に着目する。呉趼人は「婦孺の夢々として時事を知らざるを憂うるや、撰して庚子国変弾詞を為る」<sup>26)</sup>と「李伯元伝」の中で解説しているが、そうしたやや漠然とした経世、啓蒙の志がより理論的支柱を与えられ、活発化するのが梁啓超の「論小説与群治之関係」発表を契機としてである。

#### 四

梁啓超の前掲論文はあまりにも有名なので内容の紹介は割愛するが、それまで“小報”に「滑稽玩世の文」を弄しがちであった李伯元にとって、梁のこの論文が一大思想転換を促すものであったことは疑いをいれない。彼は梁啓超が日本で『新小説』を発刊した翌年、つまり1903年に他に先がけて『繡像小説』を発行する。これは清末における主要な文学雑誌の一つとなったが、『新小説』・『繡像小説』と並んで清末の重要な文学雑誌と目されている呉趼人の『月月小説』が1906年、曾樸の『小説林』が07年の発刊だから、この『繡像小説』の発刊が『新小説』に対するいかにす早い反応であったかわかる。そこに私はジャーナリストとしての伯元の時代感覚の鋭敏さを感じるのであるが、その「本館編印繡像小説縁啓」には次のように発刊の意図が明記されている。

欧米民を化するは多く小説による。樽桑崛起し、推波助瀾す。其れ此に従事する者、率く皆名公鉅卿、魁儒碩彦にして天下の大勢を察し、人類の頤理を洞し、往古を潜推し、将来を預揣し、然る後に自己の見を抒べ、

25) 阿英「重刊庚子国変弾詞叙」 阿英著『小説二談』 古典文学出版社 1958年 77頁。

26) 11) に同じ。

著して書を為り、以って齊民の耳目を醒す。或いは人群の積弊に対して砭を下し、或いは国家の危険の為に鑑を立て、その立意を揆き、一つとして裨国利民に非ざるは無し。<sup>27)</sup>

しかしながら従来中国の小説には国や民を利するものがほとんどない。そこで西洋や日本に範をとって下愚を開化しようというのである。これが『新小説』の意図を踏襲していることは明らかであろう。ここには『庚子国変彈詞』にもその片鱗がうかがわれた経世・啓蒙の志が高らかに宣言されているのであるが、事実、李伯元が『繡像小説』にかけた意気込みにはすさまじいものがあった。彼はその第1期に『文明小史』をはじめ『活地獄』・『俗耳針砭』(第2期から『醒世縁』と改題されている)・『経国美談』、さらに時調唱歌「愛国歌」と「送郎君」の2首をのせて、1期のほとんど半ばを一人で埋めつくしているのである。唱歌以外は長期連載が続くのであるが、そのために彼は評判の出世作『官場現形記』の執筆を一時中断しているほどである。

『文明小史』は「縁啓」のすぐ後におかれ、伯元がもっとも力を入れた『繡像小説』における看板小説であったと思われる。彼の代表作と言えれば魯迅の『中国小説史略』以来、『現形記』をあげるのが通例になっているが、阿英はこの『小史』こそ彼の代表作であるとする。その理由は『小史』が『現形記』よりさらに「全面的に中国維新運動時期の時代を反映し、描いている地域も広く全国から日本、アメリカにまで及んでいる」ことをあげている。ただ『小史』は「最後の10回はプロットが散漫で收拾がつかない。それで現形記ほど重視されない」というのである。<sup>28)</sup>

しかし、『現形記』と『小史』との相違はたんに「時代や地域を全面的に反映しているかどうか」といった《平面》の違いではない。ここでは作者の創作意識の変化こそ問題なのだ。つまり『現形記』を執筆し始めた頃の李伯元は中国社会の担い手は官僚だと考えており、官僚層に中国の起死回生の望み

27) 23) に同じ 144頁。

28) 阿英著『晚清小説史』作家出版社 1955年 9～15頁(但し、初版は1937年に上海商務印書館より発刊され、55年本は初版に手を入れて再刊されたものである)。

を託すからこそ官僚社会の悪を徹底して暴露しようと努めるのである。

ところが義和団事変後の情勢の変化の中で維新派にも革命派にも、さらにまた文人にも中国社会の改革に従事する、あるいは社会の発展に主体的に責任を負う可能性が開かれてきた。例えば戊戌の政変でいったんは挫折させた諸改革を、事変後には清朝政府自らの手で行わざるを得なくなる。政変後、勢力後退した維新派に代わって革命派が伸張してくる、或いは梁啓超の前記論文によってそれまでは消閑の具としかみなされていなかった小説に《人心一新》という大役が課せられる、という具合に新しい情勢が生まれて来たのである。

李伯元はこの情勢を機敏に受けとめ、新たな抱負をもって『繡像小説』を発刊し、『小史』以下の執筆に精力的に取り組むのである。彼は帝国主義列強の侵略にあえぐ中国の起死回生の方途を模索する。だが現実には満清政府は〈維新〉的ポーズを借りて人民の不満を糊塗し、日ましに高まる革命的風潮をおさえようと意図していたにすぎず、維新を唱える人々の中にも〈維新〉を口にすることによって立身出世をはかろうとする投機分子が多い。官僚は相変らずの腐敗墮落ぶりで、依然として賄賂が横行し、さらに古い思想を固守してなかなか新しい〈文明〉を受け入れようとしない。その状況を例えば『文明小史』第42回では次のように描いている。

すべての維新のやつらは、毎日平等を説き、自由を語っている。二年前、各地の学堂でしきりに騒ぎを起こしてあちこちで休校したり、退学したりした。今、この風潮は少しはよくなっているものの、上海の新聞を見ると依然としてたくさんの新しい書物の題名が印刷されており、それらは人々に自由平等を勧める話柄でないものはない。思うにこんな書物は、もし若い者が読めば彼らの性質が悪い方に誘導されてしまったままのものじゃない。さらに私が今管理しているこれらの学堂では、すべて抑圧の手段によって学生たちを治めており、もし彼らの一人一人がみんな平等を言い出して私の統制に服従しなくなれば、それでもなお私がこのお役目に当ることができようか？ 現在、根本的に対処する方

法は、第一にまずこれらの書物を禁じ、書店では売ることを許さず、学堂では読むことを許さなければ、願わくば或いは人心を引きもどすことができるかも知れない……<sup>29)</sup>

李伯元はこういう状況には反発を感じている。かといって革命派のような激烈なやり方にもついていけない。もともと彼は決して行動家タイプではない。例えば同じく〈譴責〉小説の代表作家と目される劉鉄雲は、積極的に黄河の治水工事に身を投じたり、義和団事変に際しては、政府米を管理していたロシア軍から米を安く買い取って難民に放出したりする。そのために後年、政府米私買の咎で流刑され、ウルムチで歿したという説さえあるほどである。

曾樸の場合は、文学に対する嗜好は一生を通じて一貫していたものの、彼が実際の文学運動に主体的にかかわったのは『孽海花』を執筆し、『小説林』を発行した1903年から8年までと、晩年『真美善』雑誌を発行した1928年から33年までの数年間にすぎず、一生の大部分を官僚政治家として過ごしている。

一方、思想的立場も経歴ももともと李伯元に近く「一人は〈外江佬〉、一人は広東人ではあったが、しかし意気相投じ、志趣相同じきによって互いにひじょうに親密であった」<sup>30)</sup>と言われる呉趯人にしても、1904年〈反華工禁約運動〉に参加するため“楚報”主筆のポストを投げうって（“楚報”がアメリカ人の経営であったため辞職したらしい）各地でアメリカ商品をボイコットするよう演説して回り、聴衆を湧き立たせたという。また1907年には故郷の人々の子弟に教育のないのを憐んで〈広志両等小学校〉を設立し、彼自ら学則を定めている。

しかし筆者の知り得た限りでは李伯元にはそういう政治行動、実際行動は一切ない。それが他の〈譴責〉小説作家と大きく異なる点であるが、その彼が経世の志を少しでも生かそうとすれば筆に託す他なかった。幸い彼は丘菽園にも、

29) 李伯元著『文明小史』 通俗文芸出版社 1955年7月第1版 268頁。

30) 8) に同じ。

経書に明るく駢文の專家にして又復兼ねるに小品雑著に長じ、嬉笑怒罵振盪發聾し、遊戯の三昧を得たり。……錦繡肝腸、珠玉咳唾、この才正に易々たるに非ず。<sup>31)</sup>

と評されるだけの文才を有していた。もともと官僚の家庭で育ち、自らも役所の書記を勤めたことのある李伯元には、官吏、特に胥吏たちの腐敗堕落ぶりを見聞し、体験する機会は、呉趼人等に比べてずっと多かったと思われる。彼は『繡像小説』発刊後それらの見聞を精力的に書きまくり次々と発表するのだが、以下それらについてみてみよう。

## 五

『文明小史』の次に掲載されているのは『活地獄』である。この小説は役所の暗黒面や拷問の残酷さを描いた15の物語によって構成されている。この著の執筆の目的について〈楔子〉には次のように述べられている。

私はなぜこの本を書くのか？ それは我々中国国民の第一の苦しみが天災でも戦争でもないからである。……即ちかのちっぼけな州や県の役所である。ある役所、ある官吏は、朝廷の本意では彼らに人民のために曲直を判断させ、是非を調停させ、……つまりこの官は世界における濟世利民の良いものであり、どうして苦しみを人民になめさせるはずがあるうか？ところがそうではないのである。……世の中の官吏がもし私のこの小説に目を通し、少しでも民の父母たるの心を尽くし、……或いは方法を講じて人民を害するようなことを一つ二つでも除去してくれれば人民が彼に感激することはいうまでもない。……正に、

世界昏々として黒暗を成し、  
未だ知らず何れの日光明を放つかを、  
書生一掬時を傷む泪、

31) 丘菽園「揮塵拾遺」巻5 3) に同じ 55頁。

誓う大千を洒い衆生を救わんことを。<sup>32)</sup>

ここにはたんに自分自身の憤激を戯画化して託した『現形記』などよりもっと積極的な、民に代わって苦しみを官吏に訴え善処を求めるという突きつめた姿勢がうかがえる。

『俗耳針砒』は第2回からは『醒世縁』と改題されているが、題名からも推察できるように「俗人の耳を戒める」「世の中を警世する」という目的で執筆されている。纏足・阿片・八股文を中国の三大悪とみなし、迷信を打破し、青年の遺産に対する依頼心を改めさせようと意図する。

篇中、つとめて種々の邪説を闢けば、生公の法を説くが如く、頑石をも点頭せしめるに足らん。<sup>33)</sup>

とことさらに注記している。

迷信を打破することは、維新運動の主要な目標の一つであったが、文学のジャンルでこれにもっとも努力したのは李伯元であり、『繡像小説』には『醒世縁』の他にも壮者著『掃迷帚』・嘿生著『玉仏縁』など反迷信を意図した作品が多いと阿英は指摘している。<sup>34)</sup>

次の『経国美談』は言うまでもなく矢野竜溪の同名の小説を戯曲の形式に書き改めたものである。しかしこの竜溪の原作はまず“清議報”の第36冊(1900年1月21日発行)から、中国の章回体小説の形式に改められて中国語訳が連載されている。しかしそれは原作の逐字訳ではなく、省略部分もあるし、回数も例えば原作の第2回と第3回をつないで第2回とし、さらに原作の第3回を途中で切って中国語訳の第3回に続けるなど自由に改変を加えている。

李伯元はその中国語訳をさらに戯曲形式に書き改めたので、分量は原作に比べてほぼ半分に短縮されている。例えば原作第2回の「希臘列国の形成」

32) 李伯元著『活地獄』上海文化出版社 1956年11月第1版〈楔子〉1～3頁。

33) 謳歌変俗人著『醒世縁彈詞』阿英編『晚清文学叢鈔』説唱文学卷上冊 中華書局 1960年5月第1版 第10回153頁。

34) 28)に同じ 116頁。

は“清議報”には大体入っているが、『繡像小説』では全て省略されているという具合である。しかし李伯元の作においても原作のストーリーの重要な部分は網羅されており、省略されているのは主として説明的な部分である。従って“清議報”はもちろん、李伯元の戯曲も竜溪の原作の本意は十分に伝えていると言えよう。

『繡像小説』でとくに称讃されたのはこの『経国美談』と惜秋生の『維新夢』であったが、<sup>35)</sup> 古代ギリシヤの小国〈<sup>チーベ</sup>齊武〉興隆の物語が、帝国主義列強の侵略下にあえぐ当時の中国の人々を魅了したであろうことは想像にかたくない。

さらに時調唱歌二首のうち「愛国歌」は一更から五更までの時間の推移に託して愛国者の心情を歌い、「送郎君」是北京・天津・大連湾・鳳凰城・ヨーロッパ・アメリカの状況を述べている。ここには前者を掲げる。

愛国歌 仿時調嘆五更体

一更裏 月初升 愛国の人兒心内明  
 錦繡江山須保穩 怕的是人家要瓜分 一解  
 二更裏 月輪高 愛国の人兒胆氣豪  
 從今結下大団体 四万万人兒是同胞 二解  
 三更裏 月中央 愛国の人兒把眉揚  
 為牛為馬都不願 一心心只想那中国強 三解  
 四更裏 月漸西 愛国の人兒把眉低  
 大声呼喚喚不醒 睡夢中的人兒著了迷 四解  
 五更裏 月已殘 愛国の人兒不肯眠  
 胸前多少血和淚 心裏頭一似滾油煎 五解<sup>36)</sup>

愛国歌 仿時調嘆五更体

一更 月初めて升起愛国の人、心内明るし 錦繡の江山 須らく保穩す

35) 3) に同じ 19頁。

36) 33) に同じ 42頁。

べし 怖るるは是れ人の瓜分せんすること 一解

二更 月輪高く愛国の人、胆気豪なり

今より大団体を結び四億人はれ同胞 二解

三更 月中央にして愛国の人、眉を揚げ牛たり馬たるを都て願わず 一心心ただ想う 那の中国の強からんことを 三解

四更 月漸く西にして愛国の人、眉を低うし 大声呼喚すれども喚びて醒めず 睡夢中の人迷に著く 四解

五更 月已に残り愛国の人、肯えて眠らず、胸前多少の血と涙 心裏頭一滾油煎に似たり 五解

「繡像小説縁啓」とあわせて第1期に掲載された李伯元のこれらの作品を検討する時、その執筆の意図が梁啓超ばりの啓蒙にあったことはもはや疑いを容れないであろう。

次に『繡像小説』に掲載されたものではないが、『海天鴻雪記』について一言ふれておきたい。これは『海上花列伝』の続作たるを意図したのではないかという説もあるが、<sup>37)</sup> 阿英は「彼は妓楼の遊び客と妓女の間のかけひきやだまし合いを書いて『花柳界指南』にしようとしたのではなく、この特に悲惨な社会の陰影を描写しようとしたものである」<sup>38)</sup>と述べて、これをたんなる面白半分の花柳小説とみなすことに反対している。

さらに『中国現在記』は1904、5年頃当時の日報に発表されたものという。その〈楔子〉には、

世慮を消除し、精神を愛惜し、酒後茶余の間暇無事に逢う毎に瓜棚の下に到り、二、三の村老と天を指し地に画いて古を説き今を論じ、我が生平耳に聞く所、目に見る所の世路上の奇奇怪怪のことを一一彼らに説きて知らしめん。<sup>39)</sup>

37) 拈花室主人「跋海上花列伝」今、3) によって引用。 58頁。

38) 28) に同じ 170頁。

39) 阿英『文明小史』叙引 29) に同じ 4頁。

とある。

『中国小説史稿』ではこの作品を「維新を実行した後における官界の旧態依然とした状況を反映している。守旧派は依然として頑迷なること甚だしく“維新”党は依然として新名詞を並べ立てるだけで頭の中は旧思想；貪官汚吏もやはり従来どおり忌憚なくもうけ、さらに商業、運輸の発達によって少なからぬ発財の道が開かれた」<sup>40)</sup> 状況を描いたものだという。

呉趼人の短編小説『立憲万歳』もただ官職の名目を変更するにすぎない政府の偽瞞的な立憲政策を鋭く諷刺したものであったが、この『現在記』も同様の意図を有していたと考えられよう。そこに清朝政府の“維新”的ポーズに期待をかけていた李伯元の失望と不満が読みとれるのである。

## 六

上述のように李伯元は中国の現状と政府の政策に対して批判と不満は持っていたものの、それを革命派のように激烈な手段で変えていくことには反対であった。例えば『醒世縁』で阿片や纏足の害について述べた後「これらのことは容易に改められるものではない。私は情勢に応じて有利に導き、彼らが次第に悔悟するのを期す」<sup>41)</sup> と言い、また『文明小史』第1回では、湖南省永順府の知府として赴任する柳継賢に、姚士広という老友が次のようにアドバイスする。

「あなたは今度地方官に任じられ、上は簡命を承け、下は万民を治めることになった。この知府たるものを軽視してはならない。……地方は一千余里と雖も民を化し、俗を成すのは大いにやりがいのあることだ。…我が中国はすべてにおいてかの数千年来の風俗を守って来ており、いくつかの通商港がやや時勢に従って宜しきを制している他は、その他の18省どれ一つとってみても執迷不化、扞格不通でないものがあるろうか。つ

40) 北京大学中文系1955級《中国小説史稿》編輯委員会編『中国小説史稿』人民文学出版社 1960年・北京 515頁。

41) 33) に同じ 97頁。

まり我々は興造する所あり、革除する所あるも、第一に水磨の工夫を用いて彼らを潜移默化しなければならず、断じて操切に従事して以って草を打って蛇を驚かし、かえって失敗をすべきではない。」<sup>42)</sup>

この姚士広は「学問にはきわめて根柢あり、古文の工夫尤に深く、目下年紀はすでに古稀と雖も却って最もよく時に従い変に達し、書院のあらゆる学生は一人として彼に佩服しない者はいなかった」<sup>43)</sup> という程の人物であり、いわば作者の理想像であろうが、彼は第1回目の冒頭に登場するだけで後はまったく出て来ない。つまり先述のことを訴えたいがためにわざわざ設定したとしか考えられない人物である。この姚士広のことばについて宮内保氏は「この叙述はどうみても不自然さを免れない。第一に、姚の口吻は、会話とはとても考えられない古文で描写されている。第二には、姚はこの部分だけに登場してくる人物であるに拘らず、その発言内容は、物語全篇にかかわる重さをもつ。……この種の不自然のあること、ないしそれを敢て冒すことこそ、この物語を含めて清末小説の一つの特色であるように思われる。のみならずこの特色は、一方で清末小説の未熟さを意味するとともに、他方その作家たちの創作エネルギーと深くかかわっているのではないか。」<sup>44)</sup>と指摘されているが、私もまったく同感である。

いったいに〈清末小説〉と称されるものは作者の主張を登場人物の発言に託して生の形で出すことが多い。例えば梁啓超の『新中国未来記』における孔弘道(字は覚民)の「中国近60年史」と題する講演しかり、曾樸の『孽海花』第18回では「談瀛会」(海外事情懇談会)に借りて中国改革の理想・プログラムを提示する。さらに劉鉄雲の『老残遊記』の老残は作者自身の分身であり、作者の主張を代弁している。

こういう形式は確かに彼らの小説技巧の拙なさを暴露するものであるが、同時に生の形で吐露してでも読者に自己の主張を訴えずにおれなかった作者

42) 29) に同じ 1～2頁。

43) 同前 1頁。

44) 20) に同じ 61頁。

たちの創作意識がうかがえて一面では興味深い。『小史』における姚士広なる人物の登場のしかた及び発言は、そうした〈清末小説〉の特徴の一つの端的な例であると思われる。

ところで姚士広のこの発言にも見られるように、李伯元は無知な人々を次第に開化させていくことを主張する。そのために自分の豊富な体験や見聞を小説や弾詞などに託して、まず中国の現状を人々に認識させようと努めるのである。例えば『現形記』について伯元は友人に次のように語っている。

一たび渉筆するに迫るとまた世情を描繪するに尽くは肖せる能わず、頗る自らの閱歴の未だ広からざるを媿ず、なお再び10年を閲して撰述する所あらば、或いは此の病を免るるべし。<sup>45)</sup>

また『活地獄』における「あの世の地獄は見えないが、この世の地獄は至る所にある。……正にそのために私はこの本を書いてそれらの現象を一つ一つ人民に替って描写しようと思うのだ」<sup>46)</sup> というようなことばにも彼の執筆意図がうかがえる。

もしリアリズムが現実を直視する姿勢から生まれて来たものであるとするなら、この李伯元の創作意識はリアリズム（たとえ不徹底さを免れないとしても）と称してもよいだろう。その彼の現実認識ないし批判は、維新変法運動、革命運動などの民主主義的な運動を背景とし、それらと直接、間接のかかわりを持ちながら生まれて来たのであるが、『文明小史』においても彼が手厳しく批判しているように、その運動も立身出世をはかるためのニセ維新であったり、口先だけで実行を伴わない改革であったりしがちであった。つまり改革への志向は抱きながらもまだ社会変革への確固たる見通しが中国社会全体としても、李伯元ら作家自身の中にも確立できていない時期においては、彼らのリアリズムはまだ新しい時代に適合する新しい形式を見出せず、伝統的形式に制約されざるを得なかったのだ。

---

45) 13) に同じ。

46) 32) に同じ。

だから情勢が発展してくると、その内部のリアリズムは伝統形式や文語的文体とも衝突するようになり、不徹底に終わった清末の小説界革命、詩界革命に代わって新たな、もっと思想的にも形式的にも深化した文学革命が要求されてくる。民国後の〈文学革命〉運動には、清末における小説界革命、詩界革命の上述のような事情が反映されていると思われるが、その方向についていけない部分が鴛鴦蝴蝶派などへと右旋回をとげていく(その萌芽はすでに憂愁から厭世へと暗転していく呉趼人の写情小説などにも見られるが)のであろう。しかし、李伯元はそれより前、1906年3月という時点で世を去った。彼は経世の志を抱きながらもそれが容れられぬ嘆きを、

過去の中国が既に鄙棄の心を持たないなら、未来の中国もまたどうして絶対に希望が持てないことがあろうか。しかし権力も持たない貧乏な私が、いくら撥乱反正の心と論世知人の識を抱いているとは言っても、それは無駄話をしているにすぎず、誰が私に注目してくれようか？私に構ってくれようか？<sup>47)</sup>

と述懐する。確かに呉趼人が李伯元を、

その著作また何ぞ等身にとどまるや？乃ち世を憤り俗を嫉むの故を以ってす。年僅か40にして即ち鬱々として以って終る。<sup>48)</sup>

と評しているように、その一生は満たされぬ思いもあったであろう。しかしその死の直前まで『活地獄』・『醒世縁』の筆をとり続けた李伯元(『活地獄』・『醒世縁』は『繡像小説』第69期まで掲載されており、その発行年月日は1906年2月1日であろうと思われるので、<sup>49)</sup>李伯元が歿するわずか一月半前である)は、たとえ遊戯の世界から完全に脱皮できなかつたとしても、

47) 29) の阿英『文明小史』叙引に引かれている『中国現在記』楔子より引用 3頁。

48) 11) に同じ 212頁。

49) 樽本照雄「繡像小説総目録」——附解題、著者名索引・作品名索引——『大阪経大論集』第93号 昭和48年5月発行による。

或いは新中国の研究者たちに「封建思想の持ち主」と非難されたとしても、やはり彼なりの社会改革をその死に至るまで夢みていたと考えてよいと思う。だが胡適が『官場現形記』に対して、

彼は開巻数回では至るところ儒林外史を模倣した痕跡を示している。彼は諷刺小説を書こうと意図していたかのようなのである。……しかし、作者自身の生計上の逼迫と深謀遠慮のない人々の要求は作者にそうすることを許さなかった。そこで李宝嘉はついに芸術を犠牲にして一時の社会心理に遷らざるを得なかった。そこで官場現形記はとうとう話柄を拾い集めた雑記小説とならざるを得なかったのだ。<sup>50)</sup>

と『現形記』が『儒林外史』の域にまで到達し得なかったことを惜しんでいるように、李伯元もペンに頼って生活している以上、読者の嗜好に同調せざるをえない部分もあった。だが『醒世縁』においても、

(読者が) 陳腐なことばを聞いていやになるのを恐れ、だから私がふだん覚えていることでこの風俗(纏足・阿片・迷信など——筆者註)に関係あるものを随意にいくつか書いて、七言の卑俗な言葉に編んで読者の好みに合わせるのである。<sup>51)</sup>

とか、

彈詞は婦女の喜びて読む所たり、信に然り。婦女の見識には限り有り、語るに閩外のことをもってしても多くは茫然として知る莫し。故に尤ら家常瑣事より入手すべし。作者は実に閱歴得る有り、自らの文、其の陋なるに非ざるなり。<sup>52)</sup>

50) 15) に同じ 527頁。

51) 33) に同じ 97頁。

52) 同上 103頁。

とことさらに注記しているように、それはあくまでも無知な大衆の啓蒙のためであるという大義名分を忘れない。そのためであろうか、官僚層に読まれることを期待した『活地獄』は、他の諸作品に比べて文語臭が強いように思われる。彼はこうして知識人向けと大衆向けの文体を使い分けながら、指導層と被指導層両面の啓蒙・改革を意図して精力的に執筆を続けるのである。そこには生活のためという大きな制約は存在しながらも、士大夫としての経世の志が一貫していることを認めざるを得ない。それは既述のように梁啓超の「論小説与群治之関係」発表以後、さらに明確に意識され、追求されたと考えられる。

しかし、中野美代子氏が、

李伯元の自我は、常に登場人物の口から開陳される意見へと移行するにとどまったために、表現さるべき彼の文明観のイデオロギイは、すべて客観的な風俗と化してしまうという点においては、「現形記」の風俗小説性を一歩も出られなかった。ここに「文明小史」の決定的な限界がある。が、この限界は、梁啓超の小説認識論の限界ではなかったか。<sup>53)</sup>

と鋭く指摘されているように、作者の創作意識と、それが実作にどのように反映され、どの程度成果をあげているかということはまた別問題である。だが、紙面の都合上、李伯元の作品の検討は別稿にゆずりたい。

(むぎお とみえ)

53) 中野美代子「清末小説研究 その3 風俗小説の系譜(Ⅱ)——いわゆる譴責小説について——」北大『外国語・外国文学研究』第7号 1959年 71頁。